

目的 慶長14年(1609)薩摩藩が琉球に派兵し、その後幕藩体制が崩壊するまで薩摩藩の支配を受けてきたが、その間薩摩藩への度々の表敬訪問が行われている。そのいくつかの記録をもとに薩摩藩島津家と琉球との食生活の交流を探ることを試みた。

方法 島津家文書のうち尚古集成館所蔵の料理文書として、江戸初期の琉球関係文書が9点存在する。これらの文書の解読を行い、すでに報告した『御献立留』の中にみられる15回の琉球関係への饗応献立と合わせて鹿児島と琉球国との食生活について検討した。

結果および考察 琉球関係の饗応献立は寛文10年(1670)をはじめとして、安永2年(1773)まで全部で21回分ある。この饗応に携わったのは、薩摩藩島津家の庖丁人石原家である。石原家は『当流料理献立抄』に庖丁の四家としてあげられている五々三の家石原家ではないかと思われる。饗応献立には五々三が多い。饗応は島津家が接待した場合と、その返礼として琉球関係者が行ったものがある。琉球関係者が行った饗応は料理人を連れてきてはいるが、いずれも石原家の記録に残されているところからすれば、共同作業であった可能性もある。また、琉球側からの饗応には、唐風料理で接待した場合もあり、豚肉を用いた料理もみられ、その後の島津家の食生活に多大な影響を及ぼしたことが推察される。また、島津家の庖丁人石原家が琉球の料理人へ料理を伝えた文書もあり、このような交流から沖縄へ日本料理が伝わったものと考えられた。